

カデット (立憲民主党) 1905年10月にモスクワで結成されたロシアの自由主義政党。17年の十月革命で解散。ユダヤ人の同権 (ただし基本的には同化を前提) を掲げていた。中道にP. ミリュコフ、右派にP. ストルーヴェがいた。

ゲーゲンヴァルツアルバイト 「目下の課題」を意味するドイツ語のGegenwartsarbeit。英語ではwork in the presentと訳される。この言葉自体は1901年にチェコのモラヴィア出身のシオニスト、ベルトルド・ファイヴェル (Berthold Feiwel 1875-1937) が、シオニズムはパレスチナに避難所を求めるだけでなく、将来国を創るための準備をディアスポラで行わなければならないと論じる際に用いたのが最初である。ディアスポラでの活動全般を指すゲーゲンヴァルツアルバイトには、ユダヤ人の地域社会の状況の改善や諸ユダヤ共同体に影響下に収める活動 (「共同体の征服」)、居住国家での政治参加など様々な側面が含まれる。

シオニスト会議 ヘルツルの掛け声で始まった、世界シオニスト機構主催のシオニズムで最も包括的な会合。1897年に第1回会議がスイスのバーゼルで開かれ、第4回がロンドンで開かれた以外、しばらくバーゼルで開かれた。ほぼ1年に1度のペースで始まり、1901年以降は約2年間隔となった。1913年の第11回会議の後は大戦により21年まで開かれなかった。第1回会議で世界シオニスト機構が設立され、バーゼル綱領が採択された。会議とシオニスト機構を結ぶものとして執行大委員会が置かれていた。

シオニスト機構 →世界シオニスト機構

シオニズム 「シオニズム」という語はウィーン生まれのジャーナリスト、N. ビルンバウム (1864-1937) が1890年に自身の編集するドイツ語の新聞『自己解放』で用いたのが初出。それ以来、エレッツ・イスラエル (パレスチナ) の象徴とされる「シオン (の丘)」(エルサレム旧市街に位置する) に「帰還」することを目指す思想・運動を指すものとして用いられるようになった。1881年ポグロムを機に活性化したロシアのシオニズム運動は、それまでは「パレスチナ派」や「ヒバット・ツィオン (シオンへの愛)」と呼ばれていた。現在ではイスラエル国家を支えるナショナリズムを意味する。なお、思想的には、同様の思想がポーランド生まれのラビ・カリシェル (Rabbi Kalisher 1795-1874) や、サラエボ生まれのラビ・アルカライ (Rabi Alkalai 1798-1878)、ドイツのヘーゲル左派モーゼス・ヘス (Moses Hess 1812-75) などによって唱えられていたが、運動としては1882年以降、ビルーやヒバット・ツィオンとして確立された。シオニズムは一般に以下の潮流に分類される。

実践的シオニズム 初期のものとしてはビルーに代表される、パレスチナへの入植活動を第一に掲げるシオニズム。ヒバット・ツィオンのなかではリエンブルムやウスィシュキンが代表的な人物。政治的シオニズムや文化的シオニズムとの対比で用いられるため、労働シオニズムがこの名で呼ばれることもある。

精神的 [文化的] シオニズム ユダヤ文化を強調する、いわゆる文化ナショナリズム的なシオニズム。世俗的である点で宗教的シオニズムと区別される。アハド・ハアムがその筆頭として挙げられる。実践的シオニズムと異なり、まず「ユ

ダヤ文化」をディアスポラで強化してから入植活動に入るという逆の手順が構想されていた。基本的には知識人の一部に見られたシオニズムであり、政治的にはほとんど力を持たなかったが、思想面で少なからず影響を与えた。代表的人物としては、アハド・ハアムのほか、マルティン・ブーバーや初代ヘブライ大学学長ユダ・マグネスなど。

社会主義シオニズム 社会主義思想に大きく影響されたシオニズム。ナフマン・スィルキンやベール・ボロホフがその初期の筆頭。代表的組織はボアレイ・ツィオン (シオンの労働者)。やがてディアスポラ (のちに特に米国) を中心とした社会主義色の濃いものとパレスチナを中心とした薄いものに分裂していった。後者に属するベングリオンら労働シオニズムに分類される者が社会主義の語彙を用い、また自らそのように規定したこともあり、しばしば社会主義シオニズムと労働シオニズムは同一視されるが、労働シオニズムにはアロン・ゴルドンのように社会主義を敬遠する者も含まれ、ベングリオンも少なくともマルクス主義系の社会主義とはかなり距離をとっていた。

政治的シオニズム 一般にテオドール・ヘルツルやマックス・ノルダウに代表される西欧に始まるシオニズムであり、列強の後援を重視し、外交によってパレスチナを法的に獲得することを基本方針とした。その意味では「国際政治的」である。ヘルツルの死後は、総合シオニズム、さらには労働シオニズムなどにとって代わられた。外交重視の路線は、バルフォア宣言を引き出したヴァイツマンらの一般シオニズムが引き継ぐこととなった。

宗教的シオニズム ユダヤ教を重視するラビを中心としたシオニズム。多くの正統派ユダヤ教徒はシオニズムをユダヤ教や神に対する冒瀆として猛反発していたため、初めのうちはそれほど大きな勢力とはならなかった。リトアニア生まれのため、初めのうちはそれほど大きな勢力とはならなかった。1902年に世界シオニスト機構ラビ・イツハク・ヤーコフ・レイネスらによって1902年に世界シオニスト機構に帰属する組織として発足した「ミズラヒー」がこの代表格であった。シオニズム自体には何ら宗教的な意味はなく、それゆえユダヤ教には無害であるとして、世俗的なシオニストとの協力を正当化した。他方で、彼らはシオニズムの世俗的な性格に反対し、宗教的な教育に力を入れた。

総合シオニズム 一般的には以下の「一般 (総合) シオニズム」と同一視されることが多いが、ロシア・シオニズムを中心に見る場合、区別が必要である。実践的シオニズム、精神的 (文化的) シオニズムといったロシア系シオニズムとヘルツルらの政治的シオニズムが対立したのちに、ウスィシュキンが「我々の綱領」(1904年) でこれら3つの総合 (synthesis) を掲げたことに始まる。ヴァイツマンも政治的シオニズムと実践的シオニズムの「総合」としてこの呼び名を用いた。本書が中心に据える『ラスヴェト』のシオニズムでは、パレスチナとディアスポラでの活動を総合するという意味で用いられていたともいえる。この意味での代表的人物は、アブラハム・イデルソンやダニエル・バスマニクが挙げられ、ヴラディーミル・ジャボティンスキーも第1次世界大戦前までは基本的にこの流れに属していた。彼らが立案した「ヘルシンキ綱領」(1906年) はこの潮流の象

徴とされる。

労働シオニズム 「実践的シオニズム」の延長にあり、第2次アリヤーから建国にいたるほとんどの時期、パレスチナにおける主流派をなした（とりわけ、1920年に結成された労働者組織「ヒスタドルート」が政治的にも大きな影響力を持った）。労働シオニズムは、自らの肉体労働により「エレッツ・イスラエル」と結合することを唱えたアーロン・ゴルドンらの流れと、ベングリオンらのパレスチナ・ポアレイ・ツィオンが融合した潮流といえる。やがて労働シオニズムは「労働の征服」（労働をユダヤ化する）あるいは「土地と労働の征服」のスローガンを前面に掲げるようになっていった。イスラエル初代首相のダヴィド・ベングリオンや、ベール・カツネルソンなどがその代表的人物である。イスラエル建国後もベングリオンが党首を務めた労働シオニズム系の労働党が長らく政権を担った。

一般〔総合〕シオニズム ヘルツルらの政治的シオニズムを実質的に受け継いだシオニズム、社会主義シオニズムの組織ポアレイ・ツィオンや宗教的シオニズム、修正主義シオニズム以外の「一般的なもの」として「一般シオニズム」と呼ばれるようになった。1931年までなんら綱領を持たなかった。代表的人物としてはハイム・ヴァイツマンが挙げられる。

修正主義シオニズム 公式的には1925年にヴラディーミル・ジャボティンスキーが創設した修正主義同盟に始まり、イギリス政府やアラブ指導者などの「顔色」を窺うヴァイツマンらの「妥協的」な姿勢やパレスチナ分割案をヘルツルのシオニズムを歪曲するものとして批判し、ヨルダン川兩岸の「エレッツ・イスラエル」にユダヤ人国家を建設するというヘルツルのシオニズムへの「修正」を至上命題とした（そのため、左派といわれる労働シオニズムに対してシオニズム右派とも呼ばれる）。建国後のイスラエル政治ではリクード党がその直系にあたる。労働党を倒してリクード党から初めて首相になり、1982年のイスラエルのベイルート侵攻に携わったメナヘム・ベギンもこの潮流に属する。2012年現在のイスラエル首相はリクードのベンヤミン・ネタニヤフである。

自治主義 歴史家セムヨン・ドゥブノフの思想を基軸に据えた、ロシア・東欧でユダヤ人の文化的自治を獲得していこうとする運動。規模としてはシオニズムやブンドには及ばなかったが、帝政末期に興隆したユダヤ政治の一翼を担っていた。なお、シオニストはブンドのことを「自治主義」と呼ぶことがあった。

シナゴーグ 集会を表すギリシア語の「シュナゴゲー」に由来するユダヤ教の会堂。ヘブライ語では「ベイト・クネセツ」（集会の家）。宗教的な活動や儀礼の中心であるとともに、地域のコミュニティ・センターのような役割を担うことが多い。旅するユダヤ人の宿泊所になることもある。

修正主義シオニズム →「シオニズム」の下位項目参照

世界シオニスト機構 第1回世界シオニスト会議（1897年、於スイス・バーゼル）で結成されたヨーロッパ大のシオニスト組織。これにヒバット・ツィオンが合流した。綱領に署名し一定のシェケルを支払えばユダヤ人なら誰でも参加できる。1904年に急逝するまでヘルツルが総裁を務めた。その後1911年の第10回会議までダヴ

イド・ヴォルフゾンが総裁を務め、1921年の第12回会議からはハイム・ヴァイツマンが31年までその地位に着いた。その後ナフマン・ソコロフが35年まで、次いで46年まで再びヴァイツマンが務めた。

総合シオニズム →「シオニズム」の下位項目参照

タルムード 「タルムード」はヘブライ語で本来「学習」を意味する。代々のユダヤ教賢者のハラハー（法）の解釈議論、ユダヤ教伝説・逸話（アガダー）を収集した膨大な量の文書であるラビ・ユダヤ教の中心的な聖典。古代からの口伝律法を文書化した最初のもので3世紀に編纂された「ミシュナー」であり、タルムードはその締めくくりである。

ディアスポラ 「四散すること」を意味するギリシア語に起源を持つ。ユダヤ世界では、現在では一般にイスラエル以外の地域に住むユダヤ人とその社会を指す。シオニズムの文脈では、ローマ軍に追われてパレスチナを追われて以降の時代がディアスポラ時代とされる。ヘブライ語では、元来ユダヤ教的意味合いを強く持った。英語のExileに相当する「追放」「捕囚」という否定的な意味の「ガルート」（גלות）と、単に「散っている」という状態を意味する「トゥフツォート」（תפוצות）という2つの語が当てられる。「ガルート」は、本書に登場するロシア語での議論でもголыс（ゴルス）という綴りでしばしば登場する。

定住区域（ユダヤ人定住区域） ポーランド分割以降ロシア帝国に編入されたユダヤ人の居住地として指定された地域。現在のリトアニア、ベラルーシ、ウクライナ、モルドヴァ（当時ベッサラビア）におおむね相当し、概説では、行政的には区別される会議ポーランド（ポーランド王国）が含意されることもある。この区域内でもキエフやニコラエフなどの一部都市や境界地帯では、ユダヤ人の居住が厳しく制限された。

ドゥーマ 1905年革命の成果として設置されたロシア帝国の下院。上院として国家評議会があった。第1ドゥーマ（1906年）と第2ドゥーマ（1907年）では反政府的な勢力が多く占めたが、それぞれすぐに解散に追い込まれた。第3（1907-12年）、第4（1912-17年）は選挙法改正などの成果によりツァーリ寄りの勢力が多数派となった。

ハシディズム 「敬虔派」を意味する、ポーランド＝リトアニア王国地域で発展したユダヤ神秘主義。知性主義的なラビが権力を握る伝統的な信仰形式に反対する形で18世紀に出現した。17世紀に偽メシアとして現れたシャブタイ・ツヴィの影響もある。日常的な経験を重視することからイディッシュ語を重視した。その一方で、マスキリームからはラビ・ユダヤ教以上に蒙昧的なものとして嫌悪されることとなったが、20世紀に入ると、M. ブーバーやG. ショーレムなどの西欧のユダヤ知識人が再評価することもあった。

ハスカラー ヘブライ語で「啓蒙主義」。ドイツのモーゼス・メンデルスゾーン（1729-86）が開始したとされる（スピノザをその先駆者として捉えることもできる）。近代西欧型社会にユダヤ教やユダヤ人・ユダヤ共同体をいかに適応させるかという問題意識のもとで展開された思想・運動である。いわゆる同化主義から「ユ



ロシア・シオニズムの想像力

ユダヤ人・帝国・パレスチナ

鶴見太郎——[著]

東京大学出版会